

『萬葉集』の教材化——中学教科書の場合——

西 一夫

一 はじめに

平成二〇年に小中学校の学習指導要領が示され、翌年には高等学校の学習指導要領が公示された。この学習指導要領において、国語科では小中高いずれも従来の三領域一事項の骨格を維持しながら、事項欄が「国語の特質に関する事項」から「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」と表現が大幅に改められた。新たに付加された「伝統的な言語文化」については古典重視との見方がなされるものの、指導要領が目指すところは単なる古典を重視せよというのではなく、普段の生活の中には古典的な素材や発想が生き続けていることを知るといふ側面がある。

「伝統的な言語文化」によって古典教材に対する注目が集まる中で、教科書教材としては大きな変化がない。従

来型の文学史区分による作品配列が基本となっており、取り上げられる作品にも変化があるとは言えないのが現状である。この現象は校種が上がるほど顕著になる。本稿では、上記のような状況にある教科書所載の『万葉集』を取り上げながら、その教材化の方向性の一端を示す。

二 初期萬葉——持統天皇の作品——

初期の作品で取り上げられているのは、以下の三首である。

春過ぎて夏来たるらし白たへの衣干したり天の香久

山（持統天皇）

東の野に炎の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ

（柿本人麻呂）

君待つと我が恋ひ居れば我が屋戸のすだれ動かし秋の風吹く（額田王）

歌人はいずれも初期萬葉を代表する人物であり、また作品も歌人の代表作品と位置付けられている。

これらの教材に対する統一した学習目標は、

和歌に表れた昔の人の心情や情景を読み取る。

和歌の効果的な表現や語句の使い方を読み味わう。

と定められ、内容理解の際には現代語訳をもとにして鑑賞するような導きがなされている。また、教材末尾には「和歌を声に出して読み、言葉の響きやリズムを楽しむ。」という学習活動が設定されている。声に出して歌を詠んで大まかな内容を把握し、表現の使い方を味わうことが学習活動として想定される。

このような学習活動で作品を鑑賞したり、親しんだりする観点として、次のような指摘は見逃せないだろう。

この歌は、全体の声調は端厳とも謂うべきもので、第二句で、「来るらし」と切り、第四句で、「衣ほしたり」と切って、「らし」と「たり」で伊列の音を繰返し一種の節奏を得ているが、人麿の歌調のように鋭くゆらぐというのではなく、やはり女性にまします御語氣と感得することが出来るのである。そして、結句で「天の香具山」と名詞止めにしたのも一首を整正端厳にした。(斎藤茂吉『万葉秀歌上』岩波新書)

示された現代語訳も「らし」「たり」で句切れと間を置いていることから、作品解釈を求めている学習においても『万葉秀歌』が示している内容は、声に出して作品を鑑賞する際の有効な手がかりになるだろう。また、初期万葉の作品の多くは、書記による享受よりも、口頭によって享受される傾向にあることをあわせて考えるのであ

れば、作品鑑賞を深める教材研究の視点を提供しているはずである。

『万葉集』の作品を「歌の場」に復元して理解しようとしたのは、伊藤博の「古代和歌史研究」(全八巻、塙書房)である。すべての作品において場の復元は出来ないもの、このような研究成果が教材解釈に一層活用されてもよいだろう。

### 三 後期萬葉—大伴家持の作品—

前章で指摘したような口頭による作品享受が教材研究に有効である一方で、後期萬葉の作品は様相を異にする。その端的な例として大伴家持の作品を挙げる事ができる。

春の園紅にほふ桃の花下照る道に出で立つをとめ

(大伴家持)

家持の「越中秀吟」等と称される、彼の代表作のひとつに数えられる。この一首は「天平勝宝二年三月一日の暮に春苑の桃李の花を眺矚して作る二首」の題詞によって、次の歌に組み合わされている。

我が園の李の花か庭に散るはだれのいまだ残りたる  
かも

教材は一首目、「我が園の」が二首目である。題詞に「春苑の桃李の花」と記されている内容を、それぞれの歌で素材を詠み込んでいるのである。絵画的な春の美しい情景を想像することができるといえる作品であり、学習目標の「情景を読み取る」活動として適切な教材と位置付けられる。

家持の作品で留意すべきなのは、題詞と二首の歌に見られる「その」の語であろう。『万葉集』の本文では、題詞には「春苑桃李」と記され、第一首では「春苑」、第二首では「吾園之」と二種類の漢字が使用されている。歌本文の表記については「苑」は「園」と同義だが、「園よりも広く、「園」はその一部をさすことが多い。」(『新編日本古典文学全集』小学館)との指摘があるように、字義が厳密には異なるのである。ならば、教科書本文「春の園」は作品本来の表現性を十分に活かしているとは言えない。教育漢字の問題が存するものの、作品が発信している鑑賞の手がかりを失わせてはならないだろう。そのためにも何らかの措置を講じて作品が持つ本来の意味を感じさせることが教材化の工夫につながるだろう。工夫のひとつとして、両者の漢字の違いを感じさせることがあげられる。「新宿御苑」「○○公園」など、現在でも使用されている名称を活用することで、二つの漢字が持つ違いを感じ取れるのではなからうか。

このような題詞の漢字表記と歌本文の表記との関係については、小島憲之氏が「むつかしき哉 萬葉集―春苑桃李女人歌をめぐって―」(『文学史研究』第三十五号、大阪市立大学、平六年)において詳細な考察をおこなっている。小島論に依れば、一首目が遠景、二首目が近景となり二首一対の作品として表記面での工夫が行われていると言う。それだけに歌本文を教材化に際して無視できないのではないか。家持の作品では他にも「京師」と書いて「みやこ」、「痛念」と書いて「なげき」など、さまざまな表記の工夫が見られる。そうした表記上の工夫が『万葉集』の作品には存するのである。これは以降の仮名によって和歌が記されることと大きく異なる点であり、教材化あるいは教材研究の過程で留意されなくてはならない。

言うまでもなく、初期万葉として取り上げた持統天皇の作品とは、異なる享受が行われていることは明らかである。家持の作品は書かれた歌を詠んで鑑賞すると言う視点が存在しているのである。そのため作品の理解には、書かれた漢字にも留意しながら内容を把握することが肝要なのだろう。

大陸渡来の桃花に応じて、また何となく志那の指摘  
感覚があり美麗にして濃厚な感じのする歌である。

こういう一種の構成があるのだから、「いで立つ」と

め」と名詞止にして、堅く据えたのも一つの工夫であつただろう。(斎藤茂吉『万葉秀歌 下』)

との指摘は、作品の絵画的特質を示している。

二首の叙景作品においても、初期萬葉と後期萬葉とは、その作品鑑賞には大きな質的相違が存する。

#### 四 まとめ―教材研究の可能性―

中学校国語教科書所載の作品を取り上げて、その鑑賞のあり方の違いを示した。これは教材化の工夫や教材研究として作品理解を深める際に活用できるだろう。短歌の実作を行うことが現実的ではない現在の状況からすれば、和歌教材は縁遠い存在になっている。さらに、その扱いにくさから敬遠されがちでもあるのが現実である。

和歌教材に「親しむ」手立てをどのように据えるかの工夫次第では、和歌教材は可能性を持っているはずである。その意味で平安以降の和歌が仮名で書かれている点から、毛筆の書記に着目して和歌を読み直そうとする小松英雄氏の研究成果(『やまとうた』講談社、平六年、『平安古筆を読み解く』二玄社、平二三年)は、王朝和歌の教材研究において活用されてよいだろう。

(にし かずお 信州大学教育学部)